

市町村データ連携について

スマートシティ戦略タスクフォース

状態の変化をデータで測定する

■ IoT・AIの技術発展により、これまで難しかった「人の活動」「都市の状態」を測るデータが取得でき、かつ大量のデータを扱うことができる時代が到来

Staticから(静的)Variable(可変)へ

人の活動データ



気象庁

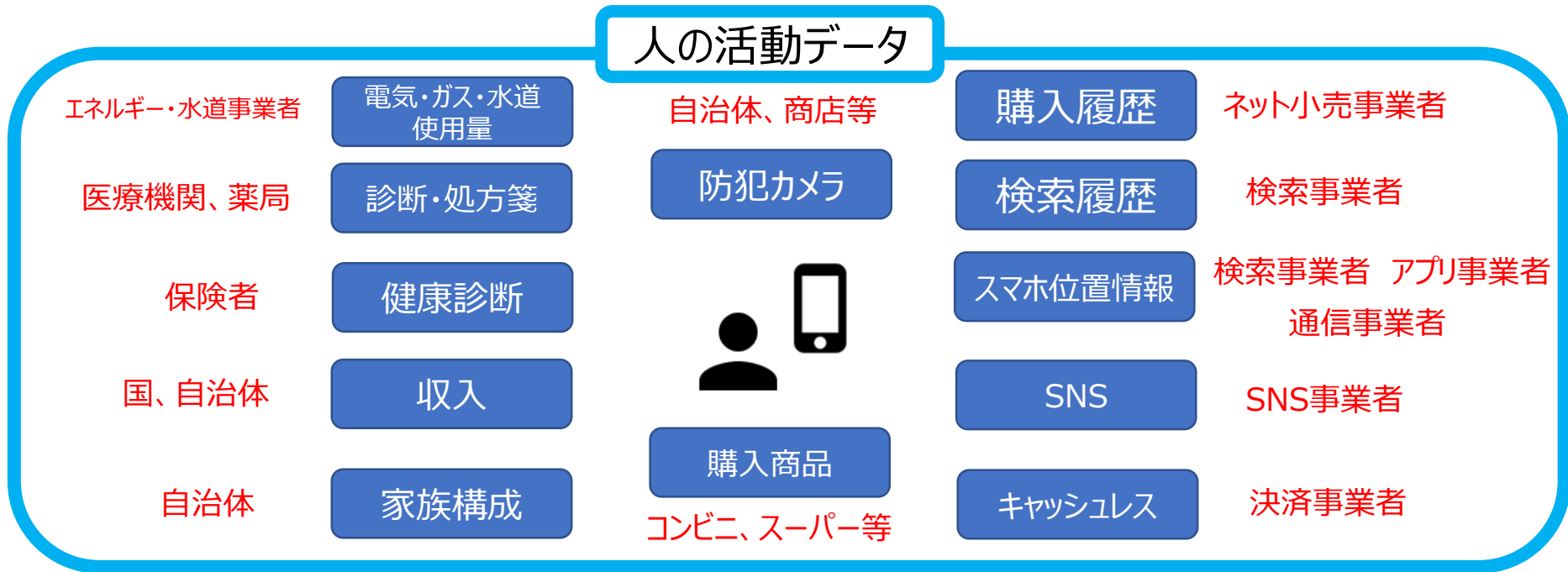
気象・地震

都市の状態データ



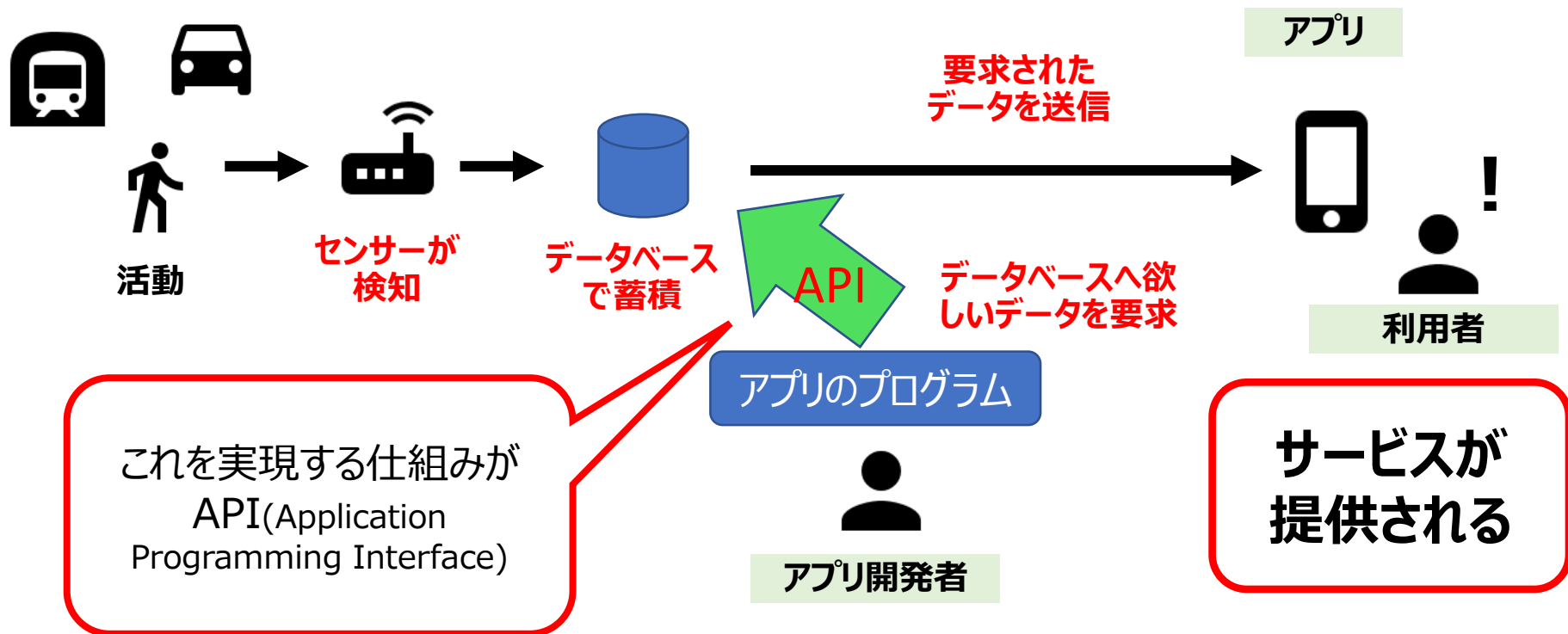
人を中心としたデータ保有のあり方

Human Centric(人間中心)なデータ保有へ



- 現状、個人の活動データはさまざまなサービス事業者が「別々に」保有している
- これらデータを有効活用し、新たな価値を創出するためには・・・
 - ① サービス事業者同士の連携 → 「データ連携プラットフォーム」が必要
 - ② 個人がデータを一か所に保有し、その活用をデータ管理者に委託 → 情報銀行、Personal Data Store
 - ③ 巨大プラットフォームが蓄積 → 新規事業開発、企業買収(M&A)

取得されたデータが使われるまで ～データの一生～



(参考) 実際のAPIのすがた

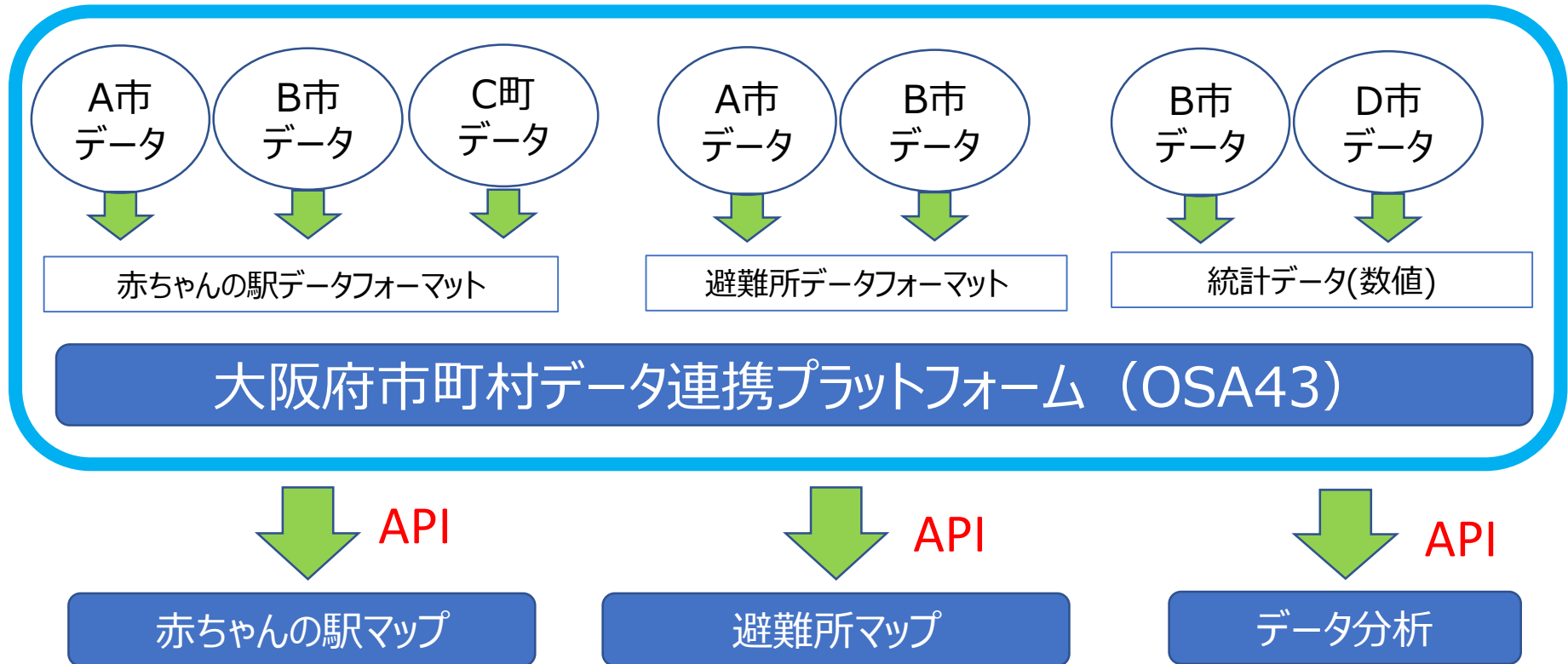
```
var marker = new google.maps.Marker({  
  position: new google.maps.LatLng( parseFloat(data[0]), parseFloat(data[1]) ),  
  map: mapObj,  
  icon: image,  
  title: data[2]  
});
```

保育所の緯度・経度のデータを要求

※大阪市保育所空き状況のプログラムより、
マップ上に保育所アイコンを表示させるコード

大阪府市町村データ連携プラットフォーム

- プログラムの共有化によって、市町村のアプリ提供やデータ分析を促進
例) 赤ちゃんの駅マップ、避難所、地域データの可視化など
- アプリのコードとデータを切り離し、市町村は定型フォーマットのデータを供与
- アプリのコーディングや分析のモデル作成は大学・企業、シビックテックと連携
- データ連携プラットフォームのあり方を模索しつつ、まず実績を生み出すプロジェクトを開始



※OSA43...Osaka Smartcity Application platform 大阪府内43市町村